

AS-350 は これほど優れている



オールウェーブは、使い方によつて、非常に魅力のあるラジオとなる。オールウェーブの一番の目的は、短波による海外放送を聴くことにあるのはいうまでもないが、そのほかに国内放送の短波中継を、キャッチすることによつて、一段とその利用価値があるのである。音楽放送なども短波で聴くと、とくに美しくきれいな音で聴くことができる。飛弾の高山などで、第二放送の電波がとどかないため、スピーク放送は、もつぱら短波で受信している状態で、こうなつてくると、オールウェーブは決して贅品ではなくなつてくる。

ところで、弊社の新製品ラジオ「五二年型、標準五球二バンドオールウェーブ」AS-350はオールウェーブのもつ本當の良さを廣く知つていただくために、文字どおり普及型として使いやすく、親しみやすい「オールウェーブ」をモットーに設計されたものであり、このデザイン・性能も弊社が「歐米に誇り得る」と自負する製品である。

「AS-350型」は、發賣以來、全國の販賣店の皆さまから、音質・音量・分離・デザインともに完璧である、と絶讃をいただいているが、この絶讃の因つてくるものは何か？ 以下これを求めてご紹介しよう。

デザインは新感覺をほこる

ラジオは美しい家具調度品でなければならぬ。

の見地から、そのデザインも、つねに新しい時代の動き・流行をとり入れつつ一般の要望にもマッチした製品を送りだしているナショナルが、五二年型タイプの「行き方」に一つの示唆をあたえたデザイン……これがAS-350型であるといえる。

「テレビタイプをラジオにとり入れた新構想……シツクなキャビネットに、モダンな金屬ネット、ネット前面一ぱいに輝くナショナル独自の最新想・プラスチック製目盛板を使用の美しい横型スライドダイヤル……さらにはダイヤル板上にスピーカーを配し、オールウェーブにふさわしい落ちつき……等々。」

新鮮な感覺をもつ洋畫家として定評のある佐藤敬畫伯（新制作協會）も

「AS-350型は、面のつりあい良くできてゐるし、木地も落着いた木目を活かし、ことにダイヤル面がアクリルレン板と眞鍮の網で構成されている新感覺は、音のすがすがしさとよく調和し、われわれ美術家の眼からみても、新時代にふさわしいデザインといえる」と感嘆されているのも、無理からぬことといえよう。

ふんわりした肉聲が

ジカに感じられる

佐藤敬畫伯とともに、藝術家夫妻として著名なソプラノ歌手、佐藤美子女史もその専門的な立場から「AS-350型」の音色について

「このラジオを通して聴く絃樂は、従来のトゲトゲしさが全く消され、音が澄

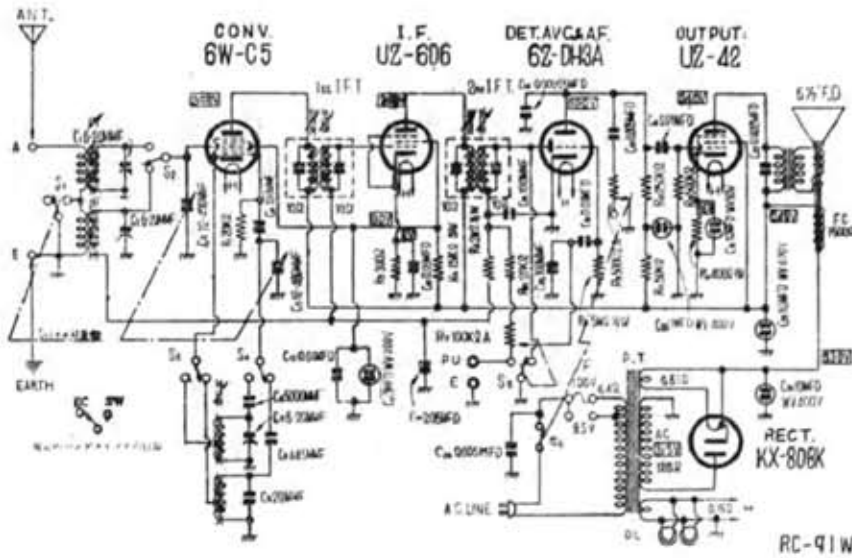
み、また聲樂では、まるいふんわりした肉聲をジカに感じられ、まことに理想に近いものだと思います」

とこれまた最上級の讃辭を浴びせられているのは何故でしょうか？

AS-1三五〇型には、なゆみない研鑽と努力の結果、生れた新設計エレクトロダイナミックスピーカー（六F・三二R型）を使用しているが、これは耳の聴感特性にもつとも適したスピーカーであり、電気的高忠實特性と相まつて、清澄な音質であり、さらに電気的出力の増大と、スピーカー自身の音響能率の向上とが加わつて、豊富な音響が得られ、管絃樂などで、最強音の場合でも歪なく再生でき、二バンド五球スーパーとして最高の音響特性をもつている。従つて「原音そのままの美しい音色」「迫力ある音色」を誇りうるのである。

すぐれた感度と分離

オールウェーブの設計条件の重要な要素として、見のがすことのでき



ないものに、波長帯の選定がある。S-1三五〇型は二バンドオールウェーブの標準方式である六メガサイクルから一八メガサイクルを採用している。すなわち、四九・四一・三一・二五・一九・一六メガターの合計六つの波長帯を、受信可能周波数として持つており、各放送局のほとんどすべてが含まれている。

しかも、ダストコアをふんだんに使用した合理的設計による、Qの高い高周波コイル、および、おなじくダストコア入り複調方式の中間周波トランスとによる「高感度」でしかも「分離度の優秀な電気特性」と相まつて、世界各国の好みの放送が、自由に、明快に聴取できるものである。

機構上の特徴

また機

糸も針も使わぬ

ミニミン

清水正己

R・C・Aの新研究

人間の祖先は裸の生活をしていた。それが獣の皮を腰に巻付けたり、鳥の羽を飾つたり、遂に衣服にまで進んだ。衣服となると縫わなければならぬ。糸と針とが必要。石で造つた針か、魚の骨の針か、糸は皮を引剥いたものか、草木の繊維か、いずれにしても「縫う」ということが始まつた。そしてそれは今から一萬五千年ぐらい前のことと推定されている。そしてその長い間、人は糸と針とで衣服を縫つてきたのである。

が、それが遂に、糸も針も使わぬで、モノを縫うことが發明された。糸も針も使わぬで縫う？ 人々は變な顔をする。それはいつた何のことだ。糸も針も使わぬで、何をどうして縫うのだと噴つてかかる。馬鹿にするな、という類つきをする人もある。しかし、それが本當に發明されたのだから面白い。ニューヨークのプロードウェイにラジオシティという大きなビルディングのあるのは誰も知つている。いわゆるR・C・Aである。このR・C・Aも優秀な實驗研究所を持つので有名である。テレビにも素晴らしいものが、ここで發表され賣出されている。

その研究所の學者の研究發表したものの中に「ミニミン」(電子ミン)というものがある。ミンというのにはミンである。生地を伸ばして、そこへ器械をかけてゆく、普通のミンと形において變りはない。このミンには針がついていない。そして不思議なことには糸も出てこないのである。

絶対に水が通らない

物質はすべて分子からできている。その分子を實に細かく分割すると原子になる。その原子は電子からできている。このミンをエレクトロン即ち電子と呼ぶのは、縫い合わせるべき生地の両端を、電子の状態にまで微細にするという意味であろうか。世は原子時代といわれるのであるから、とにかく原子にまで小さくすることが考えられる。そしてその原子を構成するものが、プラスとマイナスのエレクト

